限りのといった雰囲気で田んぼが広がっているのだろうが，そこが一面の雪である。その中を一本のアスファルト道路が延びてその道にポツン，ポツンと家がくっついている。空は晴れているけれども，横なぐりの風に吹き上げられた雪が吹雪のように舞って１０ｍ先の視界が利かない。たまさかに通り過ぎてゆくトラックと乗用車の他に物音はなく，細かな凍ってしまった雪をすいこんだ風が私のまわりをぐるぐると廻り続ける。ここでは頭をすっぽりとくるむ毛糸の帽子とたっぷりとしたマフラーがどうしても必要だ。家々の窓は殆どサッシでその密封性を余す所なく発揮できている。必要な場所に必要とされているものがあるのは，ともかく美をつくり出すものの１つに違いないと思った。

“秘境”大白川は雪の中から堀り出されたばかりだという顔をして私達を迎えてくれたが，その雪は，雪が平然として人間たちと仲良くしている風を装うことさえできるということを教えてくれた。この雪は冬の仕事を奪い，足を奪い，雪崩れをおこし，洪水をおこす雪である。しかしその日の大白川では坊やがお父さんと屋根の雪を降ろし，雪だるまも雪合戦もできそうに見えた。穏やかに山をくるんだ雪は“力”を持つ者のみが見せる大きさを保っていた，と思う。

只見線は有名なローカル線で発車時刻に遅れて走ってくる乗客を汽車が待ってくれるようなものだが，さすがに景色は良かった。乗ってくる女の人が皆美人にみえたのもよかった。しかし，この地域は山あいの谷部に細々と開かれた田畑と自然を売り物の観光とが生きる手段の過疎の地である。開発計画としてあげられているのも道路とゴルフ場とキャンプ場と温泉とスキー場と自然動物園と観光センターの設置など一連の観光計画のみである。他の計画は皆無であるといってよく，過去にさかのぼってみても電源開発があっただけだ。でもそれはそれでいいのかもしれないと思いながら，小出へと向かった。　　（３年　田辺トヨ）

東　海　巡　検（式先生）

１０月１５日～１７日

今回の主な目的は，東海地方における地形及び土地利用の変遷に関して地理学的観察・野外調査を行なうことであった。

柿なども色づき始めた明るい秋の東海の風土に足をふみ入れ，式先生の御指導のもとにさまざまな地域に接し，観察することができた。事前調査がまだまだ不十分であったことが，行く先々で痛

感された三日間ではあったが，やはり通常の講義での知識修得のみでは得られぬ，より生の現実の印象・実感として，各々のうちになんらかの形で蓄積があったことは巡検の１つの意味であり得た。

１０月１５日。午前１０時，朝早かったが，皆(?)頑張って静岡駅に集合。最初は，日本の洪積台地のうちで最も高いものの1つに数えられる日本平に足を向けた。そこでは,台地の減傾斜運動を観察，また，冬の日射しを最高にするように久能山南面の斜面を利用している石垣いちごの栽培を見ることができた。

この丘陵地を基盤とする一帯の農村地帯は近年田畑の工場・宅地転用が目ざましく，大都市周辺と同じ現象である過密化がおこっている。東海道本線を始め国道一号線沿いの各地方都市や周辺農村はみなこの現象がみられ，地価の高騰が著しいという。

午後は大井川扇状地の地形，散居集落，吉田町の養鰻業を調査した。静岡県最南端に位置する岬 ― 御前崎の近くにある国民宿舎に着いた頃には，もう日はとっぷり暮れていた。

１０月１６日。海が，まばゆい静かな秋の陽に映えて，広々と美しい。「喜びも悲しみも幾歳月」（映画）のロケ地であった冬の西風が強いことで有名な御前崎灯台の横を降りて，そこから海岸づたいに御前崎港まで一時間近くも歩く。この付近は好漁場に恵まれ，明治末期に早くも発動機船によるカツオ漁業が始められて以来，遠洋漁業が急速に発達し，特にマグロ延縄漁業は焼津につぐ盛況を示した。港がなく，陸揚げはほとんど清水港に依存してきたのが，ごく最近漁港建設がなされ十年前の写真とはガラリと異なる発展が見られる。土地が狭くて漁業の他にやる事がなくしかも港がないこの辺境地域が国際貿易港になるにいたったその間に存する，大きな行政の力を感じる。漁船内は冷暖房が備えられるなど設備の年をおっての拡充に対し，漁業従事者が年々減っている現実には問題が残る。

そのあとマイクロバスに乗り，浜岡原子力発電所（建設中）へ。大規模な設備を次々に見せていただいた。ますます伸び続ける高度な技術革新による各地への企業の進出とその地域の住民である人々との共存の困難さの一端をかい間見ることが出来た。時間は残り少なかったが，そのあと浜岡の広大な砂丘地帯，又,牧ノ原台地の茶の栽培をはじめとした土地利用状況を夕暮れまで観察してまわった。浜岡地方では，冬の西風を利用して人工的に砂丘地形を固定し，多くの農地を開いた。現在にいたるまでにさまざまな砂丘との戦いの歴史があったようである。早くから温暖な気候を利用してメロン栽培がさかんである。

１０月１７日。愛知県蒲郡市に入り，雨のため，市役所で蒲郡市の産業・観光についてくわしくお話を聞いた。三河織物の産地として昔から繊維工業がさかんであったが現在中小企業の体質を抜けられず，時代の波に押されて，斜陽化している。なんといっても蒲郡市は現在は愛知県内きって

の観光行楽地として有名であり，大規模な温泉地域として旅館・ホテルがたちならんでいる。しかし観光客は横ばい状態で発展はあまりなく，海岸の埋めたてにより景観が悪化していく一方であることには考えさせられる。日本人のレジャーに対する感覚は１０年程でずい分変わってきている。昔ながらの温泉地帯というのではなく，新しい観光産業のあり方が追求されるべきであろうと思う。形原をまわり，そのあと吉良吉田へ急いだ。小さな漁船のならんだ風景にはほっと息をつかせる叙情味があった。製塩の姿を見るつもりできたのだが，つい１年前に廃止されたとのことであった。ここでは主に製塩の歴史をお聞きした。

習慣によっておおわれながらしかし年月とともに１人１人の意志を越えて変遷する人間と自然，また人間と社会との関係の解しがたい矛盾を今回の巡検を通しても感じることがあった。地形や地層のような大自然の不変に対してそれを基盤として生きる人々の生活様態がたった１０年の歳月でこんなにも変遷しているそのコントラストには今さらながら感慨をもつ。さまざまな地域のさまざまな人々の生活の共存を考えていける方向に，私達も研究活動の中で進めていくべきであろう。

（３年　丹羽恵子）

福島巡検（内藤先生）

９月６日～８日

６日　１２時半，福島駅東口に二年生全員が集合し，まずバスで梁川町へ行く。メリヤス組合で，福島のメリヤス産業の現況と沿革について説明していただく。福島県にニットが生まれて２５年，年間生産額１５０億，業者数７００従業員総数7,０００人という一大地場産業として発展している。福島県中小企業合理化モデル工場として指定されている佐藤忠の第二工場を見学する。最新鋭高性能輸入機を備えた近代的工場という印象を受けた。梁川の町を少し歩き，バスで保原町へ向かう。

７日　９時から保原町町役場を訪ねる。主に，保原町の養蚕についてお話をうかがう。伊達地方は，古くから養蚕が行なわれ．保原町は，蚕物取り引きの中心地として栄えて来た。現在，合理化が進み，蚕種共同組合→催青場（蚕種を孵化する所）→稚蚕共同飼育所（個人経営も含む）→各農家と分業されている。蚕種共同組合を訪ねた後，福島県蚕業試験場を見学する。ここでは，養蚕，栽桑に関する試験や人工飼料使用の研究が行なわれている。午後から，農協会館を訪ねる。保原町の総農家数は2,１６２戸で，果樹栽培農家数は1,７００戸にのぼっている。粘質壌土の山間丘陵地